

父亡き後の戦後の生活体験

足柄上郡支部 瀬戸 恵子（子）

戦没者 瀬戸 隆良

戦没地 ラバウル

私の父は室生神社で近所の人達が両側に並んで日の丸の旗を振って見送って下さる中を一人ひとりに母、妻、子供を頼むと声を詰まらせ出征した。

私は五歳、母の着物をこわし近所のおばさんに洋服を作ってもらい父を見送ったことが薄っすらと思い出される。ただ漠然と戦争とはこんな無残な事とは知る由もなく月日は過ぎ去った。

母は祖母、私、妹と四大家族と蜜柑八反、畑三反と細い体で無理したため胃下垂になり三日働くと三日具合が悪いという日々。小学校から帰り今日は床に臥せていないかと心配しながら玄関の鍵が締まっていれば畑仕事とホットする。母は小さな黒板に夕食のご飯三合炊く、お風呂わかず、おやつはふかしパン、ふかしいも等母は畑に行くと記してあった。

友達は神社でかくれんぼ石ケリと遊んでいる姿を見て羨ましかった。六歳の頃、かまどに薪がもえなくいぶくて目をこすりながら、最初は固かったりしたが回数を重ねる毎にふつくと美味しく炊けるようになった。

土曜、日曜日は友達とやせんまを背負って山に杉葉拾い、薪集め、母は草刈と汗が体から流れ出ている。小さいながら私はこんなに汗が出て大丈夫かと心の中で心配していた。

妹は小さな手で食事係コロッケの下準備をし、油はあぶないので母が揚げる。働いた時の美味しさは格別、妹は自信満々。母は近所の井戸端会議にも身を寄せることなくいつも小走りで働いてくれた。

父がいなくても人並みにと口にしていた。私も田植えの準備には牛の鼻どりをさせられた。祖母の編んでくれたぞうりをはいていた。廻りを見ても父親と息子、父が居たならば母は病気になるまで頑張らなくてもすんだのに。又どんなに大雨でも母は山に牛の草刈でかごいっぱい背負い、祖母はもくもくとつぎはぎのモンペをはいて母の手助けをしていた。母は何事にもたやさぬ気ばりを・・・国の為に体をささげた父を喜んで迎え、思う存分抱きしめてあげたかっただろう。

私が物心付いた時にふと見せてくれた戦地から送られてきたハガキ、細かくぎつしりと書き続けてある言葉は常に「おふくろと子供をたのむ、たのむ」と何よりも母を勇気づけていた。母にとつては宝物で必ず現地のさし絵がかいてあった。自分の事は何一つ書いてなく今思うと辛かったのだろう。

母も近所親戚の人達に親切にしてもらい、みんなに支えられ農繁期も無事に片づいていった。母は必ず恩は自分が食わなくても返していた根性ある日本女性の一人だったと感謝する。母を思うと好きな道も言い出せず、ただひたすらに私は母の片腕となり家庭を支えてきた。私達のような辛い目にあわないように次世代に渡り戦争は絶対しない明るい日本となるよう応援したい。